

## トピックス

## 神戸レポート ～統合医療実践の試み～

## 服部 かおる\*

Kaoru HATTORI

今年5月のことです、当院開院5周年のお祝いムードは神戸で新型インフルエンザ国内初発症、のニュースを受けて吹き飛びました。ちょうど地元神戸新聞発行の月刊誌「奥さま手帳」5月号に「未来型の新しい医療のカタチ～統合医療って何だ!？」という5ページにわたる特集記事が掲載されてその手応えを感じ始めていた矢先でした。幸い来院された方のなかに発症者はありませんでしたが、いわゆる風評による受診抑制現象のため、6月はじめまで約3週間はまるで真空エアポケットに落ち込んだような日々でした。この時期に受診者が半減した医院もあったと聞いています。その後、混乱が收拾するにしたがってふたたび統合医療の趣旨に共鳴して、さまざまな助言を求め方が途切れなく受診されるようになりました。雑誌編集部へ届いた読者からの便りでは、統合医療について「そういう考え方があることを知らなかった」とか「いままで健康であることより病気の名称にこだわっていた気がする」、「未病の考えや病気にならないように防ぐという考え方に共感し、これを機に自分の体を全体的に見直したい」などの声が多く寄せられました。



私が医学生だった1980年代は、医療の技術革新がすさまじい勢いで進みCTや心臓カテーテルなどの医療技術が実用化され続々と世に出た時代です。バブルに至る右肩上がりの経済情勢もまたこの技術革新を強力にバックアップしました。ですから医師になりたての頃には、医学や医療はイコールきらめ

くばかりの科学の粋を極めたものであると感じていました。しかしちょうどこのとき優れた先達や師と仰ぐ方々の縁に恵まれました。医療と近代西洋医学は同義語ではないこと、身体は人間の存在の全部ではなくて一部であること、医療の現場では科学だけでは解決できないことも多いこと、そして世界は広くさまざまな医療のかたちや治療法があることを学びました。医師になって7年目のことです。当時の父権主義的な医師・患者関係や、すでにできあがった疾患だけに焦点を当てて治療に追われる医療現場、慢性疾患を扱う医療システムの在り方に疑問を感じたことも全人医療に興味を惹かれるきっかけとなりました。1991年信州安曇野でアンドルー・ワイル博士が「医師のためのホリスティック医学ワークショップ」を開催しました。わずか20名の医師や歯科医師がワイル先生を車座に囲んで3日間集中講義を受けたのですが、思い返せばたいへん貴重で画期的な試みでした。当時統合医療の概念は出来上がっていたもののまだその言葉はなく、大きくホリスティック医学と言われていた黎明期でした。

公立病院の勤務医を続けながら統合医療実践の機会を何年も模索し続けましたが、既成の大組織の中にあって力不足を痛感するばかりで、院内では実現困難であることがわかりました。しかし一臨床内科医としては、外来診療はもちろんのこと救急外来やICU・CCUにおいてさえも、また通常の入院治療やさらに終末期の緩和治療の場でも、学び続けてきた統合医療の視点が活かされ、患者さんのためにそして自分自身にとっても大きな力となったという自覚がありました。そうこうするうち今世紀になって当時の行政府による骨太の構造改革の波が医療現場にも波及してきました。規制緩和というスローガンと裏腹に、新しい基準やルールが臨床医療の場に持ち込まれました。多少混乱しつつも新しい風を吹き込む改革を歓迎する声も多かったのですが、私自身はこの画一的で急ピッチな改革が現場の実情にフィッ

\* フラワーロード服部内科



トしていないと思えました。そして20年間続けてきて天職とも感じていた医師の仕事に、初めて喜びを感じられなくなっていることにも気づいたのです。同時期に2001年から2年間アリゾナ大学統合医療講座アソシエート・フェローシップで、これまでワイル先生

来日のたびに教えを乞いながら独学を続けてきた統合医療の総仕上げを完了しました。これを契機に自由な空気を求める気持ちが高まって、同僚のドクターらに声援を送られつつ2004年に独立を決心しました。いわゆる医療崩壊が始まる直前の頃のことです。

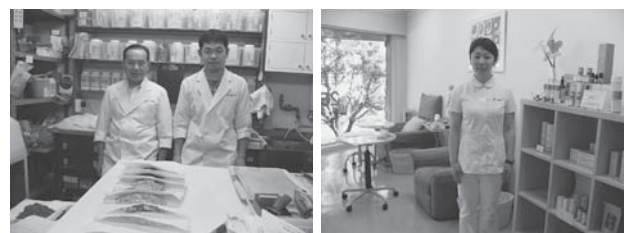
新しい場として選んだのは神戸三宮の繁華街に近い交通の便のいいところですが、これまでの勤務地からは遠く離れており、業界用語でいうパラシュート開業でした。勤める立場から急転回して経営する側に立った戸惑いはたいへん大きいものでした。そして健康保険制度改悪や診療報酬の度重なる削減政策、近頃の開業の定石どおりスローな立ち上がりなど楽観できる要素はありませんでした。開院準備中に何度も練り直して心を込めてつくった基本診療理念はもちろん統合医療を基本にしたものでしたが、敢えて前面に押し出すことなくスタートしました。生まれ育った街、神戸は開港百年を迎える風光明媚な神戸港を擁しており外国文化をいち早く取り入れてきた歴史を持ちます。しかし当時、阪神大震災と不況のダブルパンチの影響がなお色濃く、新しいものを消化吸收する体力が回復していない街の様子などを眺めて、しばらくは統合医療を封印して医院経営を軌道に乗せることに専念しました。いま振り返ればスローでも堅実な歩みでした。独自の生活習慣病プログラムを計画し、禁煙外来を立ち上げて栄養指導も始めました。二度目の秋を迎える頃ようやく明るい見通しがつき、丸二年たった頃には収支が合うようになりました。この方面のことについてはアリゾナ大学同級生のアメリカ人医師らのビジネス感覚に大いに学ぶところがありました。

2007年ワイル博士の来日講演を機に、統合医療について本腰で広報を開始しました。開院以来定期刊行している患者向けのニューズレターで毎回紹介し、ウェブサイトも特集ページを充実させ、広告誌

や雑誌の取材などでは必ず統合医療の一言を加えるようにしました。当時はまだ時間にゆとりがありましたので、要請

があればパワーポイントを持って健康講座などに気楽に出かけていましたが、その折にも忘れず統合医療を紹介しました。毎日一緒に仕事をしている看護師や受付事務職スタッフらには、院内で勉強会を開き推薦図書も読んでもらって、全員が同じ考えと同じ気持ちで動けるような体制作りを少しずつ進めていきました。

また一方でさまざまな医療ネットワークもこれに平行して種が芽を吹き成長していきました。通常の病診連携については、どの病院にも窓口システムが整えられており、また出身大学が地元であることもあって比較的スムーズに始動しました。一年遅れで同じビル内に関西医大から来られたT先生が心療内科をオープンされたことも幸運でした。統合医療をめざすためにとりわけ幸いだったのは街中の好立地のため手を伸ばせば届く範囲に各分野のすぐれた治療家を見出すことが出来たことです。この場合、同じ医療関係者とはいえ医療に関して話す言語は必ずしも同じではありません。はじめは様子わかるまで、何度も顔をあわせて確認し合い説明を繰り返しました。集まって症例検討会をするということまではできませんでしたが、患者さんの治療法についてさまざまな手段でネットワーク内の連絡を取り合うというやり方でいまのところ落ち着いています。今では互いに気心も知れて、まるで大きな病院内で一緒に働いているかのような感覚で連携しています。患者さんの紹介も双方向で行っています。このように密なつながりは、治療を受ける患者さん側からも安心だと好評です。また鍼灸や漢方の専門家による生活習慣全般にわたるきめ細やかなアドバイスは、



治療効果にも明らかによい影響があり、主治医としてもたいへんありがたいと思うことのひとつです。メンバーのそれぞれが自分のやり方を押し通すことがないよう、互いの立場の考え方や方法を尊重しあって、最善の結果が得られるように心がけています。

アリゾナ大学では教育機関でもあることから、理想的な形で統合医療が行われています。初診時には担当医師が1時間以上かけて問診を取ります。たいていの方はそれまでの医学データや経過表を持参しており、西洋医学的なおおよその診断はついています。ワイル先生ら複数の医師が検討して今後の治療スケジュールを決めます。ここからが患者さんにとってのハイライトです。おおよその診断や方針の説明を受けながら、ワイル先生と挨拶をして握手する患者さんの顔はパッと輝いて、その嬉しさがこちらにも伝わってきます。もう病気も吹き飛んでしまうのではないかと思うほどです。午後には各分野の専門家が集合してその週の症例検討会を開き、ひとりひとりのクライアントの治療方法を討論します。メンバーの内訳は内科医、循環器専門医、小児科医、腫瘍専門医、精神科医、心理療法士、鍼灸師、漢方医、運動療法士、栄養士、薬剤師、牧師などきわめて多彩なメンバーです。ワイル先生の巧みな舵取りで治療方針を決めながら、一方では各分野の専門家からさまざまな情報が提供されてメンバーで共有します。クライアントは平均2～3回ほど通院し必要な場合は引き続いて地元の医療機関へ紹介されます。誰でも大学の公式ウェブサイトから診察予約をとることが出来ますが、予約待ちはすでに数千人単位でしかも一日の初診数はわずか10人です。このあたりの模様は来春封切の映画「地球交響曲 第七番」で紹介される予定で、いまたいへん楽しみに待っているところです。

モデルとなる大学病院のやり方をそっくりまねることが難しいことは当然ですが、統合医療の現場の一番の問題は人材です。さまざまな分野の専門家の手を多く必要とする医療の形なのです。治療の方向付けを整えるためにも、関係する専門家間の円滑なコミュニケー

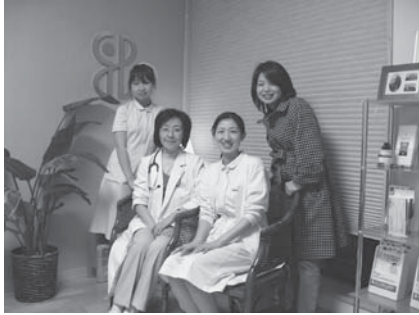


ションが通常の医療以上に要求されるということも実際には課題となります。ひとことで言えば患者さんの満足度は極めて高いものの、非常に手間とヒマがかかる医療です。そのため国内で現行の診療報酬制度のもと保険診療で診察を行うことは経営上困難であり、今後の大きな課題であるといえるでしょう。保険診療の根幹にからむ混合診療の問題にも関わってきます。迅速かつ慎重な対処が必要です。

私のところでは始めから統合医療を希望される方には、アリゾナ大学方式の詳細な問診表を準備しています。大学病院と異なり医師は私一人ですから、あまり時間をかけて病歴をとることは出来ません。では、どうするのか？ 初診時には統合医療のことを十分に理解している看護師がまず対応しています。これは現在看護師が行っている禁煙指導のオリエンテーションと同じ方法を取りいれました。彼女らは日頃診察室で私の診察スタイルを熟知しており、あうんの呼吸で仕事が進みます。また本人らも大きなやりがいを感じてくれているようです。まだ希望者がさほど多くないため対応できていますが、このところ統合医療そのものが急速に日本の社会の中で認知されてきています。これからの展開に思案を重ねているところです。

昨年からは神戸市看護大学で統合医療論を担当しています。学長の先見性ある理解のもと生まれた講座で選択科目であるにもかかわらず受講者が多く、はりきって出かけています。終了時にレポートを提出してもらっていますが、毎年予想を越える手ごたえを感じています。いくつか抜粋してみます。『患者さん自身が自らの自然治癒力にスイッチを入れられるように、自らの状態を肯定的に捉えられるように、医療者が援助していく。』『医療従事者自身にも統合医療は救いとなる』『健康は他人が定義するものではなく自分で感じるもの。医療者自身がこのことを経験すること必要』『看護師の役割は統合医療に対するオープンな姿勢を保持して、医療連携で培った方法で医療チームワークを円滑に保つこと』『国策としての医療費抑制の問題がある。世界的に治療医学から健康医学へとシフトしてきており、疾病の予防や健康増進を目的とする統合医療の必要性は高まっている』などとまとめています。19世紀の看護の祖ナイチンゲールから脈々と伝えられてきた精神に統合医療がきわめてスムーズになじむことを初めて知りました。また問題点として『統合医療自体の理解と浸透が必要。否定的な考えの医療者も多

い。』『代替補完医療について「医師に否定されると思った、聞けば医師との関係が壊れると思った」「聞



かれないので相談しない」「忙しそうなので相談しない」「藁にもすがる思いで取り入れている」「精神的な支えがほしい」そして看護師には相談する内容と思わず83%の患者が相談していない』『代替補完医療に関して保険不適合、資格制度の不備などの問題点』等がありました。具体的な提案としては『総合病院の診療科を創設し専門医/専門看護師を配置。患者の健康になったという主観的評価を重視する』などのプランもありました。これからの医療を担う学生らに、統合医療のことを知って学んでもらうことはたいへん大切であると考えています。同じ内容の講義を聞いて医学生ならば、どのような反応があるのだろうかとたいへん興味がありますが、少なくとも医療の大きな部分を担う看護の分野で、若い力がすくすくと育っていることに大きな希望を見出しています。

わが国は欧米諸国と同レベルもしくはそれ以上の近代西洋医学と、そして長い歴史を持ち学問的にも確立された伝統医療が共存し、さらにその上に国民皆保険制度という公的保険制度を持つ世界でも類のない特殊性があります。また精神性や自然への独自の優れた感性を伝承してきました。世界一の長寿を達成し、また世界一のスピードで高齢化の進むわが国のこれからの世界が注目しています。医療に関して国内では確かにいろいろな問題を抱えてはいますが、世界レベルで眺めるとたいへんに恵まれている

この医療環境を、国民の健康のためにいかにうまく活用するかということがわれわれ医療者の課題ではないでしょうか。目指すところは西洋近代医学でも相補代替補完医療でもありません、また統合医療そのものでもなく、ただシンプルに「いい医療」です。この目標に向かって自分の持ち場でベストを尽くしたい、と高い理想をめざして夢のイメージをふくらませているところです。



#### ▶ 筆者略歴 ◀

- 1983年 神戸大学医学部卒業
- 神戸大学附属病院、共済組合立六甲病院、公立日高病院を経て
- 1987年 神戸大学医学部 第1内科医員
- 1990年 神戸大学にて医学博士学位取得
- 1990年 三木市立三木市民病院 内科主任医長
- 緩和ケア委員長 健康管理増進室長 (人間ドック) 兼務
- アリゾナ大学統合医学講座 Program in Integrative Medicine (PIM)
- 2001年～2003年 Associate Fellowship
- 2003年～ PIMAA member
- 2004年～ 現在 フラワーロード服部内科院長

#### i 連絡先

〒651-0097 神戸市中央区布引町 3-1-7 神戸クリニックビル 2階  
<http://www.hattori-naika.com>